

～総論～

1 美術館がまちづくりの核になるために



並木 誠士
NAMIKI Seishi 京都工芸繊維大学/教授

都市生活に欠かすことの出来ない存在となっている美術館が、まちづくりの核になるためにはどうすればいいのだろうか。美術館を自分たちの生活の一部として認識することが可能になったとき、美術館を核とするまちづくりが成立する。そのためには…。

美術館を核とするまちづくりの実践

文化施設としての美術館は、今や都市の生活のなかで欠かすことのできない存在となっている。予算の切りつめや指定管理者の運営に替わるなど、内実はかなり厳しいとはいえ、美術館あるいは美術館でおこなわれる展示会は人びとにとってきわめて身近である。

長野県小布施町は、江戸時代後期に浮世絵師葛飾北斎がしばらく居をおいたまちとして知られている。この地に住む豪商高井鴻山との交流からはじまった滞在であった。今でも小布施町では北斎のすぐれた作品のいくつかを見ることができる。

地元ゆかりの北斎を顕彰する目的で、1976年に財団法人北斎館が設立された。北斎館は、所蔵している北斎作品を展示するだけでなく、設立時から映像展示なども取り入れて多角的な北斎像を伝えることを目指している。設立後、改築・増築を経て、現在にいたっている。北斎館では、継続的に企画展示をおこなっているだけでなく、1998年4月には「第3回国際北斎会議in小布施」を開催しており、学術研究の拠点ともなっている。

小布施町にはこの北斎館のほかにも、さほど大きくないエリアに、高井鴻山記念館(1983年)、おぶせミュージアム・中島千波館(1992年)、千曲川ハイウェイミュージアム(1996年)など、美術館あるいはそれに準ずる施設がいくつかある。そして、美術館を中心とするまちづくりを成功させた例として、多くの観光客を集めている。その小布施町はまちの方針として「潤いのあるまちづくり」を掲げており、美術館を

はじめとする文化施設の設立もその一環として位置づけられている。

地域に根ざした美術館

千曲川ハイウェイミュージアムのホームページには、その設立と目指す方向を「新しい小布施文化の発掘や地域の文化資質の向上など町立の文化施設としての大きな役割を果たしながら、地域にねざした、心の癒される企画運営を進めています」と記している。北斎館設立以降の小布施町における美術館設立の流れが、まちの文化資質の向上と町民に対する「癒し」の提供の一環として位置づけられている。

また、中島千波館のホームページには、そのおもな活動として、「地域の文化財の保存活用」「人と人、人と文化の交流、そして文化的な資質の向上を目指す



写真1 小布施のまち



写真2 北斎館



写真3 高井鴻山記念館

した展示会、セミナーなどの事業展開」「住民参加による『美術館づくり』を目指したボランティア事業」があげられている。つまり、住民参加による「美術館」づくりが、そのまま、まちの文化資質の向上と「癒し」の獲得になってゆくという考え方なのであろう。このようなまちの姿勢の反映として、2008年10月には、地域に根ざした美術館・博物館の創造をテーマに「おぶせ 学術・芸術・文化サミット」を開催している。そして、ここで問題意識として設定されている「地域に根ざした」ということが、まちづくりの核として美術館が機能するための重要なキーワードなのである。

まちづくりに住民が持続的に協力

私が最初に小布施を訪れたのは、まだ北斎館ができて間もない時期であったが、当時の地方にある美術館のいくつかと比べると、さまざまな工夫を凝らしたその展示が印象的であった。この当時、小布施でほかに見学すべき場所としては、北斎が天井画を描いた岩松院がある程度であった。

北斎館、高井鴻山記念館などがあるまちの中心部分を構成する建物群は、公的な建物以外もイメージがゆるやかに統一されており、街灯や各観光地を指示する案内板も和風でレトロな統一感が感じられる。駐車場やトイレなども整備されている。このような町並みやそれに付随する施設の整備については行政の指導が想定されるが、小布施の場合、それだけではなく住民の積極的な参加の意志が感じられる。そのような住民参加が実感できたのは、小布施のまちにあふれる「花」である。

小布施町の文化観光協会が発行している『信州おぶせマップ』には、「花により人と人との交流を深め人に優しい花咲くまちを目指して…」と記されてい

る。具体的には、まちのなかの「点」としての美術館やその他の施設相互をつなぐ、いわゆる「線」の部分である道筋に積極的に花を植えているのだ。つまり、まちとしては点としての施設(ハコ)をつくるだけでなく、そのハコとハコの間を結ぶ「線」の充実あるいは美化を進めているということになる。

このことは、重要な意味をもっている。つまり、行政はハコというハードをつくるだけでなく、それを常に「美しく」維持するための活動を進めているのだ。建物を建てるというのは、ある意味で一過性だ。案内表示や街灯も同様である。一方で、花を植えるということは、日常的な世話が前提になるため、まちづくりに住民が持続的に協力する体制が必要になってくる。花を植え、世話をするという活動は、住民の協力とホスピタリティがないとできないことである。まちづくりが成功する秘訣はおそらく、この「花を植える」という行為に象徴されているように思う。つくりっぱなしの行政が多いなかで、このような努力を住民の協力を得て進めていることが小布施のまちの大きな特徴である。小布施のまちには、美術館を中心としたまちづくりが成功するためのいくつかの条件が揃っている。

まちづくりが成功するための条件

最初にあげられるのは、その「地理的な規模」である。小布施駅や各美術館などに置いてある『信州おぶせマップ』には「おぶせの街はスニーカーサイズ」と記されている。他地域から訪れる人びとのために駐車場が整備されているとはいえ、一旦車を置けばあとはまさに歩いてまわられる手頃な広さである。そのうえ、町内美術館等周遊シャトルバスも運行している。もちろん小布施町自体は大きいですが、核



写真4 倉敷美観地区

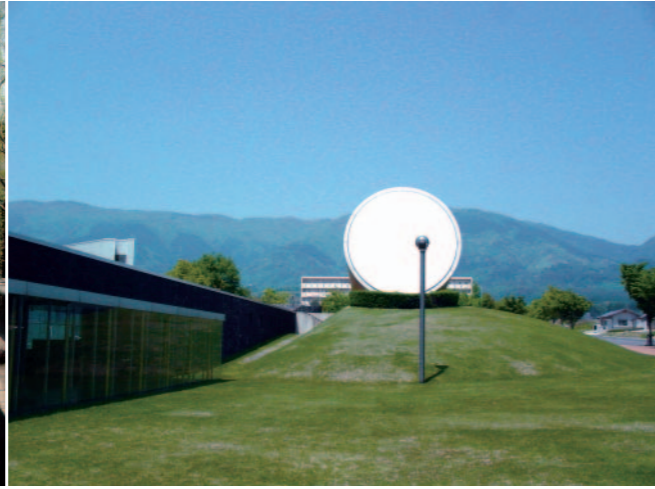


写真5 奈義町立現代美術館



写真6 ビルバオ・グッゲンハイム美術館



写真7 国立新美術館

となるエリアを明確に定めて、その範囲での整備を進めている。

第2の点は、花植えに端的に示されるような「意識の共有」である。建物をつくるというのはあくまでも一過性であり、問題になるのは、その後の持続的なメンテナンスである。建物、つまり美術館自体の整備の問題である部分も大きい。それ以上に、建物を取り囲む周辺部分の整備や美化が重要である。それができるためには明らかに住民の参加、言い換えればまちづくりを持続しようとする意識をまちの人びとが共有している必要がある。

そして、第2の点ともかかわる第3の点は、まちの人びとが「美術館をいかに自分たちのものと意識するか」である。それには「外」からの眼差しを常に受け入れるということが必要だ。現在、各観光地には、おもちゃや人形などをテーマにした、その土地にかならずしも特有ではない、つまりどこの土地にも置換可能なミュージアムが多いが、そのようなミュージアムは、やはり、どこか地元・地域と乖離した感じを与える。その点「まず北斎ありき」という小布施町の場合は、地元の人びとがアイデンティティをもちやすかったことは明らかである。だからこそ、美術館を中心とするまちづくりに住民が積極的にかかわれるのだ。つまり、まちづくりは、自分たちのためでもあり、また、訪れる人びとのためでもあることが自然なかたちで理解されることになる。

北斎館が国際シンポジウムを開催するというのも大きな意味をもつ。国際シンポジウムをすれば、当然海外からの人びとが訪れる。そのような目を意識することで、住民は小布施のまちおよび北斎の価値を再確認することができる。

古典的な絵画を中心とするまちづくり

小布施に近い事例として、より早くから美術館を中心とするまちづくりを進めていた岡山県倉敷市の倉敷美観地区をあげることができる。

1930年、日本で最初の私立西洋美術館として開館した大原美術館を目玉としたこの地域は、1979年に国の重要伝統的建造物保存地区に指定された。大原美術館のほかにも倉敷考古館、倉敷民藝館などがあり、1888年にできた倉敷紡績工場の跡地を利用したアイビスクエアでも知られている。倉敷の場合は、戦後間もない時期から美術館を核としたまちづくりが関心を集め、整備が進められた。1968年には倉敷市伝統美観保存条例が、1978年には倉敷市伝統的建造物群保存地区保存条例が、2000年には倉敷市美観地区景観条例が制定されている。ここでは、古い町並みを活かしながら観光客を迎え入れるまちづくりをし、現在でも多くの観光客を集めている。倉敷駅近くに1997年に開園した倉敷チボリ公園が、経営難のために2008年をもって閉園したと対照的である。

まちづくりがおこなわれるためには、当たり前だが、時間が必要である。倉敷の場合も小布施の場合も、まちからはその時間の流れを感じることができる。そこで核となっているのは、北斎や「泰西名画」と呼ばれるヨーロッパの古典的な絵画であった。これらの美術そのものが、時の流れのなかで価値を高められていったものだ。

現代美術を中心とするまちづくり

そのような点で興味深い事例が、1994年に開館した岡山県の奈義町立現代美術館である。建築家磯崎新の構想でつくられた斬新な美術館で、建築的に

も興味を引かれるが、そもそも美術館というものに対するコンセプトに新しさがあり、注目を集めている。しかし、この美術館を中心として「現代美術でまちづくりをしよう」と考えていた町長の構想が、首長の交代という政治的な状況の変化により中断した。そして、現代美術というものの自体がまちの人びとの共有意識に十分に訴えることができなかったことがあり、結果として美術館を中心としてのまちづくりには至っていない。

奈義町の例だけでなく、現代美術を中心とする美術館の場合、まちづくりの核となっている例はさほど多くない。そのような点で注目すべきは、ビルバオのグッゲンハイム美術館である。

スペイン南部バスク地方の港町ビルバオは、旧市街と別に港湾地区がある。この港湾地区に、1998年ビルバオ・グッゲンハイム美術館が建てられた。アメリカのグッゲンハイム財団が設立した分館のひとつである。グッゲンハイム財団の美術館としては、ニューヨークのセントラルパーク近くにある、フランク・ロイド・ライト設計のグッゲンハイム美術館(1959年設立)が有名である。ライトの美術館建築としておおきな注目を集めたが、現代美術の展示を中心とするビルバオ・グッゲンハイム美術館もまた奇才フランク・O・ゲーリーの設計になるユニークな美術館である。独特の一風変わった外観が注目されて、開館以来多くの人びとを集め、現在この美術館を中心として大規模なショッピングセンターが設立されるなど、まちづくりが進んでいる。

大都市における再開発地区

大都市では、その規模と歴史という点からも、まち全体の核として美術館を設定することは難しい。そ

のなかで、1994年にオープンした恵比寿ガーデンプレイス、2003年にオープンした六本木ヒルズ、2007年に旧防衛庁跡地にオープンした東京ミッドタウンのような都市再開発の動きのなかで生まれた新しい「まち」が、それぞれ、東京都写真美術館、森美術館、サントリー美術館や国立新美術館というように、かならず美術館を内に含んでいることは注目してよいだろう。

これらの再開発地は、都市部とはいえ、ほとんどリセットされてゼロからまちづくりがおこなわれたもので、エリアが限定されており、その設計コンセプトのなかからあらかじめ美術館が組み込まれていたものである。このことは、現代社会における都市的機能に美術館が不可欠であることを示している。それぞれの美術館は特徴的であり、積極的に展覧会活動をおこなっている。さらに、これら大都市のなかの美術館は、深夜まで開館しているとか、共通パスを発行したり、連絡シャトルバスを運行したりという努力をしている。しかし、当初から美術館の設置がプログラミングされているとはいえ、これら美術館を中心にしたまちづくりということではなく、新しくできたまちの構成要素として重要であったのが美術館であったということである。そして、それは、外から来る人びとに対する配慮である。

まちは、基本的に、そこに住む人びとによって構成されている。美術館がまちづくりの核になるには、まちの人びとがその美術館を「自分たちの生活の一部」として意識できるような統一感が必要なのである。それが可能になったとき、美術館を核とするまちづくりが成立するといつてよいだろう。